

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 38 回 第 10.1.2 節～第 10.1.6.2 節

2019 年 7 月 15 日

小 田 勝

264 頁「10.1.2 ク活用・シク活用」の続きから。265 頁 5～6 行目、「ひきし」もまた、中古ではふつう「ひきなり」という形容動詞形で用いられ」というのは、両者の関係としてはそうなのだが、一般に、中古和文で現代語の「低い」の意を表す語は「^{みじか}短し」である。

- ・短き灯台に火をともして (枕 138)
- ・このこやくしといひける人は、^{たけ}丈なむ (=背丈ガ) いと短かりける。(大和 138)
- ・もとの品^{しな}高く生まれながら、身は沈み、位短くて人げなき (源・帚木)
- ・[身分ガ] 高きも短きも、女といふものは (源・東屋)

次例の下線部は、簾が短くなるように高く巻き上げたのではなく、簾を低く下の方だけ巻き上げたのであろうという (松尾聰 1984)。

- ・月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く巻き上げて人々みたり。
(源・橋姫)

つまり、中古和文では「長し・高し⇔短し」という対になるわけである (このような不均衡な対義語として、現代語では「高い⇔低い・安い」、「薄い⇔濃い・厚い」、「かたい⇔やわらかい・ゆるい」、「退社⇔入社・出社」のような例がある)。

同頁 8～9 行目、「-ei」で終わる形容詞では、「うるせし」という語もあった。古典語の「うるせし」は「良い」という意味であるが、現代人の語感と相当のずれがあって、誤解されそうである。

同頁 2 つ目の◆の下、繰り返しを語幹にもつ形容詞は、東郷吉男 (1982b) にリストアップされている。次のような例は、現代人には発想しにくい。

- ・山伏、いと^{たふとたふと}尊々しく声をなして言ふやう (宇治 1-5)

繰り返しではなく、異なる形容詞語幹を重ねた「^{とほなが}遠長し」(ク活用) のような語もある。

同頁、この節の最終段落は、ク活用⇔シク活用の時代による変化例。他の語例としては、「^{ひさ}久し」が古くはク活用だったかと思われる。

267 頁「10.1.3.2 形容詞の順接仮定表現」。次例はまた、「-く+は」の「は」が係助詞「は」でない証拠といえる（本文に問題がないとすれば、であるが）。

- ・今宵また会ふべくはこそは、みづから定めめ。（俊頼髓脳）

「10.1.3.3 形容詞の補助活用」では、269 頁用例(6)～(9)の類例、

- ・憂きにかく恋しきこともありけるをいざつらからむ（=サア私モ冷タクシヨウ）いかが思ふと（実方集）

270 頁用例(11)～(17)の類例をあげる。

- ・今夜身の痒かりて、え寝入り侍らざりつるに。（今昔 26-17）

271 頁「10.1.5 形容詞終止形の名詞法」。ここでも、類例を 1 例あげておく。

- ・その介八郎（=広常）を梶原景時して討たせたること、景時が高名言ふばかりなし。双六うちて、さりげなしにて盤を越えて、やがて頸をかい切りてもて来たりける、まことしからぬほどのことなり。（愚管抄）

この節の次に、節を新設する。

10. 1. 5' 形容詞連用形「-く」+サ変動詞「す」(新設)

「形容詞連用形「-く」+サ変動詞「す」の形で、形容詞に動作的意味を加え、「…と扱う」「…と思う」の意を表す。

- (1) ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし（=カワイガリ）給ひけり。（伊勢 84）
- (2) 母君なくてだにらうたうし給へ（=カワイガッテ下サイ）。（源・桐壺）
- (3) ^{みぎのおとど}右大臣のいたはりかしづき給ふすみかは、この君もいとものうくして（=オックウガッテ）（源・帚木）
- (4) [未摘花ハ] 行ひなどいふことは恥づかしくし（=恥ズカシガリ）給ひて、…数珠など取り寄せ給はず。（源・蓬生）
- (5) この対に（=紫上ガ）常にゆかしくする（=聞キタイト思ッテイル）御琴の音（源・若菜下）
- (6) ^{あゆ}歩み疾うする馬をもちて走らせかへさせ給ふ時に（竹取）
- (7) 国の賢^{さか}しき人として国王よりはじめて国の人重くせしかば（=重ク扱ッタノデ）

(今昔 2-33)

(8) 人の心みな改まりて、ただ馬・鞍くらをのみ重くす (=大事ニスル)。(方丈記)

◆「すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ」(竹取)も、「見まほしがる」の意である。

272 頁「10.1.6.1 名詞の形容詞化」。類例をあげる。

- ・左方申云、右、無下にたはぶ戯れしくや。(六百番歌合・方人難陳)
- ・今の世に〔琵琶ノ奏法ヲ〕まことしう伝へたる人をさをさ侍らずなりにたり。(源・少女)

その他の語例に「おとなし (<大人)」「しふねし (<執念)」などがある。

同頁「10.1.6.2 動詞の形容詞化」。「なつかし」は動詞「なつく」の形容詞形で、「なつく」という気持ちになる、「なつきたくなる」の意(「慕わしい、親しみやすい」)を表す。このように、動詞と対になる形容詞は、動詞の表す動作を自然にするような気になる(「動詞+たくなる」)の意を表す。ここに、そのような、動詞と対になる形容詞をリストアップしておこう(左側の動詞のほうが先に成立したという意味ではない)。

勇むいさ〜勇まし、いたは勞る〜いた勞し、いた痛む〜いた痛まし、いつ齋く〜いつか嚴し、いと厭ふ〜いと厭はし、い忌む〜いみじ、いろ色めく〜いろ色めかし、うと疎む〜うと疎まし、うらや恨む〜うらや恨めし、うらや羨む〜うらや羨まし、うれ憂ふ〜うれ憂はし、おそ恐る〜おそ恐ろし、おぼおぼめく〜おぼおぼめかし、おも思ふ〜おも思はし、かがや輝く〜かがや輝かし、こ好む〜こ好まし、こ恋ふ〜こ恋ひし、すさすさむ〜すさすさまじ、たはぶ漂ふ〜たはぶ漂はし、つづ慎む〜つづ慎まし、なげ嘆く〜なげ嘆かし、なまなまめく〜なまなまめかし、なご悩む〜なご悩まし、にぎ賑はふ〜にぎ賑ははし、にぎ妬む〜にぎ妬まし、はや逸る〜はや速し、は映ゆ〜は映ゆし、ひろ広む〜ひろ広し、ふる古めく〜ふる古めかし、むつむつかる〜むつむつかし、めざ目覚む〜めざ目覚まし、めざ目立つ〜めざ目立たし、めづめづ〜めづめづらし、もどもどく〜もどもどかし、やす瘦す〜やすやさし、やま病む〜やまやまし、ややややむ〜ややややまし、ゆ行く〜ゆゆかし、よそ装ふ〜よそ装ほし、よづ世付く〜よづ世付かはし、わぶわぶ〜わぶわびし、わら笑む〜わら笑まし、を招く〜ををかし。

[引用文献追加] 東郷吉男 1982b 「平安時代の重複形容詞索引」『大阪薫英女子短期大学研究報告』17/松尾聰 1984『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』笠間書院